

日野舜也さんとスワヒリ研究 —『スワヒリ社会研究』**の書評に代えて

日野さんと一緒に、ザンジバルはストーンタウンの迷路を歩いたことがあった。96年8月のことで、私が代表を務めた3年連続の科研・東アフリカ学術調査に参加協力してもらったのだった。

日野さんは、このタウンのイスラーム的迷路の仕組みを実によく知っていて、迷う様子は微塵もない。時折、行き交う年配の住人が「シェヘ」(Shehe)と敬意を込めた挨拶を投げかけてくる。「イスラームの長老、先生」の意だ。それというのも、日野さんは、ずっと以前に、奥様と二人で、このストーンタウンの一角に長期間住み込まれたことがあったから、覚えている住民がいてもおかしくない。

その年、日野さんと私は、改装前の、荒れ放題のザンジバルホテル(最古のホテルで、元はスルタンのゲストハウスだった)に泊まっていた。そこは、栄華の夢失せたここ何十年かの間、私の定宿でもあったのだが、破れ放題の窓ガラス、流れないトイレのほか、屋根伝いに忍んでくるかもしれぬよからぬ輩に用心しなくてはいけなかった。とはいえ、思うほどに悪人は少なかったし、チェックインするなり、広々とした裏庭で旨いビールが呑めるという趣向である。すぐ近くの賑やかで、インド洋に沈む夕日が売り物のアフリカハウス(元英国人クラブ)と違って、白人観光客もまず泊まらない。

私は短い滞在中にも、東端のチュワカ、南端のマクンドウチの村々まで足を伸ばすなど、民話や方言調査の仕事が念頭を離れない。タウン内部でもよい協力者が見つければ、ノートとテ

レコを持参してうろつきまわっていた。仕事といっても、一日に正味2時間が限度で、あとは車で走っているか、でなければ呑み、遊び呆けているのだが…。日野さんかというと、ただタウン内部を歩き続けるだけで、別段何かの調査に従事し始めるようすはない。人の往来や、路傍の商店をしきりに覗き込むだけである。

あるとき、以前から顔見知りの住人が *Umefikia wapi?* と私にスワヒリ語で声をかけてきた。2〜3秒のあいだ、この簡単なスワヒリ語への即座の返答に窮して、息を殺していることがあった。日野さんが後で、あれは「何処に泊まっているか」と聞いたんだよね、と何気なく教えてくれた。「それくらい分かっていたよ」などと、負けん気は出さずに、素直に教えてもらっておいた。本当のところ、その意味をすぐに理解できておらず、間髪を入れない返答に窮して、スワヒリ語学者の私は不面目なところを目撃してしまわれたわけだ。現地生活の豊富な日野さんにとっては何でもない日常表現だった。言語学者の小生が、これはスワヒリ語動詞の適用形の妙味ある表現などと「感心」していても、日野さんは私のスワヒリ語能力にほとんど「寒心」していたに違いない。

この間、ザンジバル在住で有名なアスリートの島岡さん宅(『我が志、アフリカにあり』朝日新聞社刊にご夫妻のことは詳しい)に遊びに寄せていただくなど、楽しい数日だった。ある日、迷路の出店で珍しい果物があつた、散歩のお土

*中部大学国際関係学部国際文化学科

**本書は、平成18年〜21年度科学研究費補助金による出版でISBNはない。基盤研究(A)課題番号18251006

産だと、携帯用ナイフを添えて、その果物を、休んでいた私の部屋に差し入れてくれることがあった。異国の旅先で、こんな親切を経験したことはなかった。またある時、私の教え子の女子学生が単独で東アフリカを旅行しており、たまたまそれとなく辺鄙な島で見かけたので、近くの簡易ホテルで泊り客のリストを見せてもらい、本人だと確かめたところ、ケニア人のカマウ(キクユ人によくある名前)という男性と一緒に泊まっていることがわかった。なぜか妙に気を揉んだことを日野さんに話すと、「それはカマウなことよ」とまじめな表情で諭してくれた。

日野さんの名前をはじめて知ったのは、私がアフリカ研究をスタートさせた当初からで、60年代の中頃のことだった。そのお名前は、大先輩、故富川盛道、故和崎洋一先生らと常に重なる。東京外大アジア・アフリカ言語文化研究所のプロジェクト「アフリカ部族社会の比較研究班」で初めてお目にかかったのではないと思う。やや後輩にあたる私が、60年代の末期に書き上げた稚拙なスワヒリ文学論には、すでにタンザニアの奥地ウジジ(行方不明のD. リビングストンをH. スタンレーが「発見」した場所としても有名)で人類学的調査を続けられていた日野さんの初期論文から引用もしている。

本著作集には、この40年間に、稀有のフィールドワーカーとして、スワヒリ都市ウジジの民族誌的研究から出発されて、スワヒリ文化の歴史的展開、拡大、その結果である地域的構造の考察まで進まれた日野さんの1968年から2006年までに発表された25編の論文が集められている。どれも、日本と世界のスワヒリ研究の推進に貢献された、燦然と輝く業績である。日野さ

んは、富川、和崎、石毛、梅棹といったパイオニアたちのスワヒリ学・アフリカ研究のすべてを吸収しつつ、ご自分で発酵、醸成されて、ご自身のスワヒリ学(都市人類学)の樹立に成功された。

本書に収められたスワヒリ社会・文化関係の日野さんの25編の論文は、いわゆる部族本位制社会から国民社会の形成へと歩んできた東部アフリカのこの40年の変化を物語る貴重な証言となるものである。同時代の我々全員の共有財産であると同時に、若い研究者にとっては、有益な今後の出発点となるものであろう。その意味でも、本書の編集発行にあたられた嶋田義仁、中村亮のお二人の慧眼に心から感謝したい。

嶋田義仁・中村亮編、日野舜也著『スワヒリ社会研究』(イスラーム圏アフリカ論集)名古屋大学大学院文学研究科 比較人文学研究室、平成19年4月刊、総507ページ。

なお、同じ名古屋大学から、日野さんの以下の論文集が刊行されている。これらをあわせて、日野アフリカ学の全貌が見渡せる。

嶋田義仁編『アダマワ地域社会の研究』(アフリカ伝統王国論集Ⅰ)、2003

Y. Shimada (ed.), *SWAHILI AND FULBE: Frontier World of Islam in Africa*, (African Kingdoms Collection IV), 2004